分野：Ｉ類　　発表題目：父を超える農業後継者になる

先代は昭和１０年に幕別町途別に入植した。私の家は私で４代目となる８１年続く農家だ。最初は１６ｈａと少ない面積だったが、少しずつ畑を増やしながら、父の代で２７ｈａにまで規模を拡大し、農業を営んできた。現在、私の家では小麦、ビート、馬鈴薯、豆の畑作４品を主力に、質の良い長芋を栽培している。私自身も幼い頃から畑に行き、種まきや収穫の手伝いをしてきた。生産から出荷までを経験し、農業の難しさや楽しさを肌で感じてきた。ひたむきに仕事に取り組む父の背中を見て、私はいつしか「父のように誰からも頼られる農家になりたい。」と思うようになった。帯広農業高校農業科学科に入学したのも「父を超えたい。」と決心したからだ。

高校生活が始まり、まず驚いたのは農業科目が多いことだった。野菜や作物、経営に関することなど技術だけではなく、知識も幅広く学ぶ中、クラスみんなでかぼちゃ栽培に取り組んだ。今まで土づくりやサイズを意識してもの作りをする経験が無い私にとっては、苗作りや玉直しはとても新鮮だった。

そんな中、農場視察で訪れた富良野のメロン農家で食べたメロンの味は衝撃だった。ハウスの中で豊かに育ったメロン、美しく張った網目、果肉と果汁と甘さのバランスが絶妙だった。「どうすればこんな美味しいものができるのだろう」と思い、私は学校で先生に聞いてみた。すると先生は「手間暇をかければ良いものが穫れる。これからはメロンのような高収益作物を作っていくことも必要だ。」と教えてくれた。私はその話を聞いてメロン栽培への気持ちが高まり、メロン分会を希望し、１年目の取り組みがスタートした。まだまだ始まったばかりだが大きくなるメロンを観察し記録していく毎日は発見と勉強の連続だ。私はこの取り組みを家の経営に生かしたい。

実際に、家の経営に生かすとしたら、どうすべきか考えてみた。使われていないハウスを有効利用するのだ。各家では、ビートの植え付けが終われば空きハウスが出てくるはずだ。同じ志を持つ人でメロン組合を作り、ハウスを地域で共有し、栽培をともにする。これはきっと人手不足の解消と地域のブランドとして「途別メロン」を確立させることができるだろう。

さらに新たな方法として売り方に注目した。メロン組合のＰＲイベントとして大試食会を開催する。そうすることで味を知ってもらい、顧客を増やし、個人や飲食店などへの取引も見えてくる。さらに、出荷時期も自分の家にある大規模低温倉庫を使うことで消費者の多様な要望にも応えられるだろう。そういった地道な活動を通してブランド力を広げていきたい。

もう一つ力を入れたいことは長芋の収量を増やすことだ。先代から受け継いできた肥沃な土壌を生かし、太くて長い高品質なものが収穫できている。変化にも的確に対処できるよう手間暇をかけて栽培しているのだ。しかし最近では連作障害が起き始めている。そのため父は、あえて長芋の面積を減らすことで畑を休ませる決断をした。これは多くの農家が直面している共通の課題だ。この解決に向け私なりに考えてみた。

まずは土づくりだ。８１年引き継いできた大切な土台を私の代で絶やすわけにはいかない。学校の授業で省耕起という方法での栽培を実践している。これは、土をプラウで上下に反転させず、サブソイラで亀裂を入れていく方法のことだ。この際、堆肥を１０ａ当たり５トン使用している。作物の生育は良好だ。自分の家では堆肥を入れていないため、これらを活用し、土壌の微生物活性を高めたい。そうすることで作物に適した土を作ることができる。

父もまた新たなことに挑戦している。例えばビートの栽培方法の一つに工夫を施すことだ。２０年以上も農家をしている父でも新たな技術を取り入れようと勉強を怠らない。そうした姿勢を私は尊敬している。父の周りにはいつも人がやってくる。「作業は順調か。」「定植を早めたけど駄目だったわ。」というような会話を作業をする中でよく耳にする。普段の会話の中から父は情報を得て、自分なりに勉強している。先代や父が培ってきた地域の人とのつながりがあれば、農業の抱える問題にも立ち向かっていけると私は思っている。だからこそ未来を担う私たちが長年受け継いできた技術や知識を大切にしなければならない。私は未来の農業経営者として挑戦する。

以上で発表を終わります。